かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

鮮やかな秋色に染まるもみじ
（11月16日 大教会神苑で）

教祖１３０年祭に向かって

三年千日　**さあ！　おたすけ**

祈る　動く　つなぐ

立教176年
11月号

秋季大祭講話

人をたすける心になってくれ

大教会長様 お話

立教176年笠岡大教会秋季大祭は10月21日、大教会長様祭主のもと、役員・教会長・よふぼく・信者、多数参拝の中、執り行われた。大教会長様は神殿講話で、立教のご宣言から話しを起こされ、そこに籠められた親神様の思召を分かりやすく解しつつ、教祖年祭に向かう私たちの歩むべき道筋を諄々とお話しくだされた。要旨は次の通り。

●立教のご宣言に籠められた思い

今日は、秋の大祭に籠められたをやの思い、そして、その思いが、言わば、明治20年に開花し、そして、教祖年祭の歩みに繋がったというお話しをいたします。

我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。

この、親神様、直々のお言葉をもって、この道が始まりました。

この一言の中に、いろんな思いが込められていると思案します。

先ず第一に「我は元の神・実の神である」。

これは、今まで、いろんな信仰の道があったが、これから始める道は、元の神・実の神――これは、いわゆる「神」という表現ですが、「神」という名の「親」であるということを後々、いろいろと教えられた――つまり、元の親・実の親の道であるということを、先ず最初に明かされます。

元の親・実の親、つまり、私たち人間をお創りくださった親であり、そして、今日もなお、親心をもって育ててくださっている実の親であるということを、先ず、明言されています。

続いて「この屋敷にいんねんあり」。

勝手に現われたのではない。人間創造に当たっての約束――九億九万九千九百九十九の子数の年限が経ったならば、いざなみのみこと様の御魂のお方に、「神として拝をさせよう」という約束の下、人間創造に掛かられた――その約束の年限が経ったから(旬刻限)、このたび、この世に現われた。

そして、その目的は、「世界一れつをたすけるため」。これから、世界を、親神が望むところの陽気ぐらしの世界に立て替えてやろう。

そのために、続いて、いざなみの御魂を持っておられる中山みき様を「神のやしろに貰い受けたい」。

その神のやしろのみきを通して、どうすれば、陽気ぐらしの世界に立て替わっていくのかということが、この大宣言の中に述べられていると思います。

その中で、先ず、思案すべきは、その目的＝「世界一れつをたすけたい」です。

親神様の思いが、そこにあればこそ、元の神・実の神だということ、たすける旬がきたということ、そして、元々、いざなみのみことの魂であり、私たちの、本当の産んでくれたをやの魂を持っているということ、そういう一つひとつのことも明らかにしなければならなかったと思います。

＜実行目標＞人のたすかりを願いましょう

おたすけ・お願いカード 集計：17，491枚

平成２５年９月２１日～１０月２０日

平成２５年累計：87，014枚

●最後の教えたる所以

世界一れつをたすけたい、そのをやの思いはどこにあったのか、そして、世界一れつをたすけるとはどういうことなのか、改めて、思案したい。

普通に信心する者にしてみれば、「神がたすけてやろう」と言えば、ただ、たすかりを願って信仰するのは当たり前でしょう。今までは、それが、「信心」の姿だったと思います。

しかし、今までと同じように信心したのでは、わざわざ「このたび、世界一れつをたすけるために」といって現われる必要はなかった。

なぜなら、それまでに、たすけとして啓いてきた道も、すべては親神様が啓かれた道であって、わざわざ、旬がきて「たすけるために天降った」というのは、そこにある、親神様のたすけの思いが、大いに変わったからだと思います。

今までの教えと同じように、ただお願いするだけでもたすけてはくださいますが、ただそれだけでは、親神様が望まれる陽気ぐらしの世界には立て替ってはいかない。

なぜなら、今までも、いろんな宗教・教えがあって、お願いはしてきたはずなのに、どういう人間生活になったのか――苦しめ合い、いがみ合ってきた。

だから、今までと同じようにお願いするだけの信仰なら、わざわざ、この道を啓く必要はないわけで、これからは、「信心」の姿・思いを変えてくれということではないでしょうか。

それなら、この道は、どういう信心をすればいいのか、どうすれば、親神様が、陽気ぐらしの世界に立て替えてくださるのか、ということで、（そのひながたを示すために）教祖を月日のやしろにしなければならなかった。

教祖が、御自ら、50年のひながたをお通りくださり、それを辿ることによって、たすかり――一人ひとりのたすかりであると同時に、陽気ぐらしというたすかり――をご守護いただける。

●たすけ心の涵養

教祖50年のひながたを温ねると、貧のどん底に落ち切られたそのお姿は、先ず、心の欲を捨て去れば、自ずと親神様のご守護がわかるようになり、親神様が十分に働いてくださっているという喜びに満ち溢れた世界が生まれてくるということを教えられた。

先ず、心の欲を捨て去ることによって、喜び・感謝の心が生まれると、喜ぶだけではなく、少しでも親孝行したい、御恩報じしたいという心になりはしないでしょうか。

親孝行を望むのならば、親神様のお望みは、「人様たすけなされ」、その一つだけなのです。

教祖は、をびやだすけから始まって、次々と不思議なたすけを顕わされるが、その中にも、官憲圧迫などの事情も起こってくる。その中を、なってくるのが天の理、すべて、親神様が陽気ぐらしに立て替えてくださる手立てだと、いそいそと出掛けられるなど、喜びいっぱいに、陽気ぐらしの境地をお見せくださった。

だから、教祖のひながたは、喜び・感謝に基づく御恩報じの心であり、そして、御恩報じの心によるたすけ一条の道である。――これによって、陽気ぐらしの世界になってくるということです。

▽心通りにご守護くださる世界

では、たすけ一条の道を通れば、なぜ、陽気ぐらしの世界に立て替わってくるのかということで、「かしもの・かりもの」について思案したい。

心一つが我がの理。心一つの理に、親神様が心通りの自由のご守護をくださって、今日、こうやって、結構に通っている。

これは、身体だけではありません。

（せんしよの）いんねんよせてしうごふする
これハまつだいしかとをさまる　一・74

つまり、身体だけではなく、立毛一切、そして、関わらなければならない身の回りの多くの人たちも、すべて、私たちの心通りに寄せてくださり、心通りにご守護くださっているということでしょ

う。

すべては、親神様のご守護の世界であり、すべてが、私たちの心通りに働いてくださっている姿です。

▽自分勝手な願いからの脱却

ところが、皆、自分勝手に、我が身勝手の願いばかりしていれば、当然、そういう心通り（願い通りではない）のご守護をくださいます。

たすけてやろうということで、いろんな教えを啓いてきたが、皆、それぞれが、自分の都合のいいように信仰し、自分勝手なことばかり願ってきたが、それでも、たすけてくださった。

でも、我が身勝手のお願いは、要するに、他の人からとってみれば、不都合な点が多々ある。「私」の心通りにご守護くださる世界が、皆にとって都合のいい世界ならば何も問題ないが、決して、そうではないでしょう。

「私」にとってありがたいご守護であっても、「私」以外のより多くの人たちにとって都合が悪ければ、「私」は「神様のご守護があった。陽気ぐらしや。」と勝手に喜んでいるだけで、それは、銘々勝手の陽気は真の陽気と言えんとはっきり仰っている。――それは、親神様の望む陽気ぐらしの世界ではないということでしょう。

だから、今までと同じように、我が身勝手の都合、我が身勝手のお願いをして、信仰するなら、結局、争いはなくならないし、陽気ぐらしの世界に立て替わるはずがありません。

でも、それが、だんだんと我が身勝手な心遣いになればなるほど、自分には都合はいいが、他人には都合が悪い。――しかし、神様にしてみれば、皆可愛い、一れつ我が子――だから、一れつ可愛い子どもであるということを明らかにするために、一番最初に、「我は元の神・実の神」と仰ったのでしょう。

この道を信仰し、元の親・実の親として、親しみを込めて信心する我々にとって、ただ単に自分がたすかるように願うだけの信仰でいいのでしょうか。――それだけでは、今までの信仰と何も変わらず、結局は、人間同士が争いをして、苦しめ合いいがみ合い、それだけの世界にしかならない。陽気ぐらしの世界にはなりません。

▽人をたすける心になってくれ

つまり、我が身勝手の心遣いは、我が身勝手の守護しかしてやれない。自ずと争いは生まれ、苦しめ合う姿になってしまう。さあ、頼むから、人をたすける心になってくれ。

一人ひとりが、身上・事情のときにこそ、しっかりと親心を感じ取り、喜び・感謝の心で御恩報じの道をより奮い立たせ、今、道に繋がる皆の中で、我がのことを思い留めてでも、人のたすかりを願い、人だすけをすればするほど、今までは、我がの守護しかなかったが、「たすけ合い」ということをするなら、「たすけ合いの守護」をしていただける。――だから、頼むから、人をたすける心になってくれ。

いつまで信心しても、自分のことだけを願っていたのでは、結局、人間関係がだんだん疎かになり、隙間ができて、たすけ合いがなくなってしまう。きっと、その理で、また、自分が苦しまなければならないから、余計に、我が身勝手の心遣い、我が身勝手の願いをしなければならなくなってしまう、これがいんねんの世界でしょう。――だから、頼むから、少しでも人をたすける心になってくれ。

そうしたら、一人だけのたすけではなく、一人のたすけりを通して、多くの人にたすけの守護を顕わしてやることができる。心通りなんだ。これは、人間創造のときから、何も変わっていない。心通りに守護をした結果が、今の世の中の姿ではないか。私たち、一人ひとりのたすけ心がいかに大事か、思案してほしい。

ただ単に、お礼申し上げるだけではなく、この道を信ずるお互いは、喜び・感謝とともに、なおかつ、人だすけを願う心を一回でも多く使い、人だすけの行ないをする、それが大事だということ

を、改めて心におきたい。

●たすけ心の実践

▽人をたすける道具立て

50年のひながたの集大成は、つとめとさづけでした。つとめもさづけも人だすけの道具立てです。我が身だすかりの道具立てではありません。

教祖は、元のいんねんがある上から、親神様が、直々に入り込まれて、いかようにも、人をたすけることができた。をびやだすけから始まって、不思議なたすけを次々と顕わすことができた。しかし、私たち一人ひとりに入り込むわけにはいかないので、先ず、入り込むための理作りとして「つとめ」を教えてくださいました。

ようこそつとめについてきた
これがたすけのもとだてや　六下り目4

人をたすける心で、おつとめをつとめたら、そのたすけ心を受け取って、いかようにも働くことができる。

いくらおつとめをしても、我が身だすかりを願うのなら、結局、我が身だすけにしかならない。人だすけの道具立てとしてのおつとめだから、人をたすける気持ちでつとめてくれ。

つまり、一人でも多くの人に、人をたすける心を遣ってほしいからこそ、25年先の定命を縮めてまでこのおつとめを急き込まれたということではないでしょうか。

だから、ただつとめればいい、ではなく、おつとめをとつとめる間は、人のたすかりを願ってつとめる。

おつとめは、ゆっくりしても、せいぜい2時間です。月の内の2時間、このたった2時間、常に、「あそこにも困っている人がいる、ここにも困っている人がいる、たすけてください。世界中が一日も早く、たすけ合って、陽気ぐらしの世界に立て替わりますように。」と、たすけ心でつとめをするところに、心通りに守護をしてやろうといって不思議なたすけを次々と顕わしてくださる元があるということではないでしょうか。

▽たすけ心実動の旬

そして、教祖年祭は、三年千日を仕切って、何をするのか――この「たすけ心」を遣うということです。

この三年千日は、自分のことをおいてでも、人のたすかりを願い、人だすけをするための三年千日だということです。

だからこそ、今、こうして、「成人目標」――これもたすけ心になる、これもおたすけになる、先ず、簡単なところから、できるところからしてみませんかというもの――を作り、わざわざ皆さん方にお渡ししているのです。

この三年千日、一回でも多く、少しでも多く、我がことを抜きにして、人だすけの心を遣いましょう。

ところが、これを「頂いたが、どこにやったかな？」とか「貼ったけど、どこに貼ったかな？」と忘れてしまっている人が多い。

日々、たすけ心を遣っているのなら、何も問題はないが、日々のたすけ心を遣うことを忘れてしまっているのでは何の意味もない。

失くしてしまったら、また持って帰って、これを一番目に付くところに貼って、「これも、ひょっとしたらできるかも知れんな、これは少しできて

いるな、これやってみたいな」というもの、こういうものを確認しながらしてみませんか。

たすけ心を遣うだけです。たすけ心を遣えば遣うほど、親神様・教祖がより自由のご守護を顕わしてくださり、陽気ぐらしへと導いてくださる。

我が身だすかりだけを願う信仰は卒業しましょう。もう少し成人して大人になって、人だすけを願える信仰になりましょう。そのために、これを大いに利用していただきたい。

どうぞ、各教会ごとに、すべてのよふぼく・信者の端々にまで徹底してほしい。

よふぼく・信者でなくても構いません、他の信仰をしていても構いません。こんなのを一緒にしてみようかと誘ってください。

信仰している・していないではなくて、人のたすかりを願うということが大事なのです。

今の世の中、人のたすかりを願う人が少なくなったからこそ、「絆」と声を大にして叫ばなければいけない時代になったのではありませんか。家族がたすけ合って、たすかりを願っていたら、自ずと、絆というものが生まれてくる。

さあ、信仰なんか関係ありません、いっしょにしてみませんか、と一人でも多くの人に声を掛け、共々にしましょう。

人のたすかりを願う人が増えれば増えるほど、親のご守護が増えるということから、「おたすけ・お願いカード」というものも用意しています。

今日は、1万7千枚余りを、教祖の前にお供えしていますが、笠岡に繋がるよふぼく・信者の数からすれば、1月に1人が10枚書くだけで、この4倍にはなるので、まだまだ、少ない。

だから、もっともっと、お願いをしなければ、まだまだ、ご守護いただくまでにはならないだろうと思います。

これも、信仰するしないは関係なく、年齢も関係ありません。小さな子どもでいいです。

一人でも多くの人に、声を掛け、渡していただいて、そして、一人でも多くの人に書いていただく。

名前が書けなかったら書かなくて結構です。名前が分からなかったら、「今日すれ違った救急車の中で苦しんでいる人」・「今日にをいがけに出て、腰が痛いと言っていたおばあちゃん」でも構いません。

「一回でも多く人のたすかりを願う」ということが目的ですから、どこの誰かは関係ありません。

たすけ心を遣えば遣うほど、そのたすけ心をお受け取りくださり、心通りに、「たすけ合い」というご守護をくださる元になるということです。

どうぞ、この成人目標とお願いカードの徹底を図っていただいて、一人でも多くの人が、1日1枚、これを書く――同じ人を書いてもいいし、毎日、違う人でも構わない、どんな使い方でも構いません――1枚でも多く書いていただいて、1回でも多くたすけ心を遣うために、こういうものを大いに利用していただきたい。

そして、これをお供えし、人のたすかりを願って、一生懸命におつとめしてこそ、「たすけづとめ」になることができるのです。

おつとめをつとめたらたすけがあるのではなく、たすけ心でつとめるからこそ、その心をお受け取りくださって、自由のご守護を顕わしていただくたすけの元立てとなるということ。これを、改めて、心におかしていただきたい。

▽ありがたき道の路銀

そして、もう一つ、おつとめと合わせてお急き込みくださったのが、おさづけです。

おさづけの理を頂戴し、よふぼくになったら、1回でも多く、このおさづけのお取り次ぎをする。

年祭に向かっての三年千日、よふぼくは、ただお願いするだけではなく、お願いしたら、今度は、たすけの実動をする――もちろん、にをいがけ、そして、身上者があれば、おさづけをお取り次ぎする。

そこで、忘れてならないのは、このおさづけの意味合いです。

長の道中、路金なくては通られようまい。路金として肥授けよう。　伝・第三章

というお言葉があります。

このおさづけは、道を歩む者にとって路銀として授けてくださる、道を通る上での、神様からのお与えだということでしょう。

でも、これは、お金だけではありません。道を通るために必要なものとして、神はすべて与えてやろうと仰る。

ただ、おつとめをつとめるだけでは、なかなか、人は寄ってきません。お金も寄ってきません。たすけの元立てとしてお働きはしてくれても、たすける人間に対してのお与えはありません。

おたすけしようと思ったら、当然、衣食住も必要でしょうから、それも、すべては道の路銀、道を通るために必要なものでしょう。

さらに、おさづけを路銀として授けられたということは、つまり、おさづけをお取り次ぎすれば、路銀として受け取るということです。

それは、どんな形で、路銀としてお与え（お返し）くださるか分かりません。

（生活を豊かにするためではなくて）道の上でどうしても必要というならば、お金をお与えくださるでしょうし、食べ物も与えてくださるでしょう。

おつとめ奉仕人が少なくなったから、おつとめ奉仕人が必要だというのなら、人も寄せてくださるでしょう。

神殿が手狭になったから、お道を通るため（おつとめをするため）に必要だというのなら、一回り大きな神殿建築も与えてくださるでしょう。

これは、教会の者だけではありません。おさづけのお取り次ぎは、道を通るためのものです。

皆さん方の子や孫がなかなか信心してくれないとして、でも、この子や孫が信心してくれたら、この家は、もっと、幸せで、陽気ぐらしに向かう道筋になってくるのにと思うならば、なおさら、おさづけさえ取り次いでいれば、それで、道の路銀のお与えがありますから、今度は、後に続く者、今まで、信仰しなかった者が、急に、「これから私も信心するよ」とか、今まで、御供しなかった者が、「給料が上がったから、今度、ちょっと御供するわ」というように、心を繋いでくれるようにもなる。この元にもなるのも、おさづけにあるということだろうと思います。

ふじゆうなきやうにしてやらう
かみのこゝろにもたれつけ　九下り目２

神様に凭れついて、おさづけを通しておたすけの道を歩んだら不自由のないようにしてやると、明言してくださっています。

そうなるのは、すべて、おさづけに関わってくるということではないでしょうか。

おさづけの意味合い――道を通るための親神様からのお与えとして、このおさづけがあるということ。これを、改めて、お互いに思案したい。

▽おつとめ奉仕人をご守護いただくために

私たちは、今、教祖130年祭に向かって、おつとめ奉仕人をご守護いただこうと、声を掛け合って、教祖120年祭の翌年から今日まで通ってきました。

その間、どれだけのおさづけのお取り次ぎができたかを思案すると、なかなか、寂しいものがあろうと思います。

教祖130年祭目指して、おつとめ奉仕人をご守護いただくお互いは、先ず、教会に繋がるよふぼく一人ひとりが、１回でも多く、路銀であるところのおさづけをお取り次ぎする。――そのことによって、神様がお働きくださって、おつとめ奉仕人をご守護くださる元になる。――これを心において、年祭に向かって、１回でも多くおさづけの取り次ぎができるようにつとめたいと思います。

改めて、年祭の意義を振り返り、さづけは道の路銀であるということをしっかりと心に納めて、先ずは、たすけ心をつかみ、そして、たすけ心でもって、おさづけを１回でも多く使う、これが、教祖130年祭に向かう成人の歩みである。――これを心において、後、２年３ヶ月、今からでも遅くはありません、ともどもに精一杯つとめさせていただきましょう。

《以上要約》

温故知新

いきいきエピソード 30

我が、いきエピ3
伝える努力の大切さ

先日の事である。私は大教会に詰めていたのであるが、その時神事所にいなかったので、別の方が電話に出られた。「もう母親が幾許（いくばく）もないのです。それで葬儀をお願いしたいのですが・・・。亡くなりましたら、また電話差し上げますので、宜しくお願い致します」という事だった。午後神事所で、「皆、あちこち行って先生しかおらんナ。電話かかってきたら先生、頼みます」と話しているところへ、まことにタイミングよく電話が鳴った。「今、母親が亡くなりました。宜しくお願い致します。〇〇と申します。近くの会館で致します。日取りはまた連絡致します」電話を取ったのが私で、これは、神様が、お前行ってくれ、との事と理解して、午後三時からの神殿掃除を終わって教務上の事務にかかっている時、電話があり明日午後七時通夜、翌日午前十時告別式でお願い致します、という事となった。あまり費用のかからないように家族葬にいたしますので宜しく、という事で一人で出向かせて頂く事にした。早速に払い詞・遷霊・鎮霊・火葬諄詞・葬後祭詞とできるだけの準備をして、霊代、お社、三宝など必要道具一式を用意、翌日、玉串を用意して正午頃大教会を出発した。目的地に着いたのは午後五時前で、早速に準備に取り掛かった。遷霊祭には二十人ばかりの方々が来られ、始まる前に出直しの意味、ご当家が大教会に伏せ込まれた事など話させて頂いて執りかからせて頂いた。八時頃終わって、遅い夕食となり、先祖の事全く知りませんでしたとの言葉に私は驚いたのであるが、それよりも明日の告別式の事があるので、ご家族の事、亡くなられたご本人の略歴など聴きながら過ごさせて頂き、九時頃旅館にご案内頂いた。「ごゆっくりして下さい」との言葉で部屋に入らせて頂き、徐（おもむろ）に用意した奉書にしのび詞を書き始めた。十一時頃何とか書き終わり床についたが、疲れた。翌日十時から式に臨み、火葬場に行き、帰って直ぐ葬後祭、遅い昼食を呼ばれて、食事の間に五十日祭、納骨の打ち合わせをして、私は骨あげは失礼して葬祭場を出させて頂いた。

ながながと書かせて頂いたのは、四代を数えるご当主の初代、二代、三代は、大教会に墓地があり、今回亡くなられた方は、三原に住んでいて春秋の神霊祭前後、あるいは盆には、いつも奥津城に来られて草引きをしておられた。また、初代は大教会史にも掲載してあるように、高屋分教会の地盤の開拓、育成に生涯伏せ込まれた人である。にもかかわらず、現在のご当主はほとんどそういうご先祖の道すがらをご存じなく、今日まで過ごされておられた。私が話をさせて頂いて、「そうですか。全然知りませんでした」との答が返ってきた時には、私の方が愕然としたのである。思えば、当主の父母は三原に住んで、父親が四十九歳で亡くなられ、その後は当主は仕事の関係で大阪の方に出て家居を構え、母親から先祖の話を聞く事もなかったという事なのだろうかと思う。現在のこの核家族、無縁社会の中で、信仰の伝達、温故知新の難しさを感じさせて頂いた次第である。

私は時々思うのであるが、それぞれの教会で正月などの心改まる時に寄ってきた親戚縁者に教会の歴史を、先祖が歩んでくれた道すがらを会長が話す、あるいは前会長が話す、これは別に正月でなくても盆とか、年祭が執行された時とかでもいいと思うのであるが、とにかく伝えていくという意思をしっかりと持っていないといけない、そういう時代にお道は入ってきているのではないかと思案する。

今回の葬式に出向かせて頂いて、ほんとに愕然として改めて我が周辺を振り返らせて頂いた次第である。

（前史料部長）

よふぼく勉強会開催

秋季大祭後

育成部

育成部（吉岡壽部長）では10月21日、大教会秋季大祭後、会議室で「十全の守護」をテーマに、よふぼく勉強会を開催、20人が参加した。三代温生講師（雲東分教会長）は、自らの豊富な体験を通して数々のご守護、理を立てる一条の通り方を懇切に話された。引き続き同テーマについての質疑応答が行われた。

11月の勉強会は海外伝道講習会のため、中止。次回勉強会は12月月次祭後、テーマは「徳つみ」。

熱心に受講される

第9・10回「有志ひのきしん隊」実施

青年会

9月16日、9回目となる有志ひのきしん隊が、

隅々まで整備

重機出勤

岩部分教会（岡山県真庭市）に出動し、6人が参加した。

教会の敷地に生える草木を、草刈り機などを使って隅々まで整備した。

また、10月20・21日には、10回目となる有志ひのきしん隊が、大教会で活動し、6人が参加した。

今回は、前奥様の五十日祭に向けての、墓地や参道の整備を重機などを使って行った。

四代会長夫人
合祀、五十日祭、納骨執り行う

笠岡大教会四代会長夫人・上原せい子様の合祀、五十日祭は10月22日午前10時から、大教会世話人島村廣義本部員斎主のもと大教会祖霊殿で家族、親族、大教会役員、部内教会長、よふぼく、信者ら多数が参列し執り行われた。

合祀のあと五十日祭祭文が奏上され家族、親族、そして大教会役員、部内教会長、よふぼく、信者の代表が参拝した。その後、大教会墓地で納骨式が行われた。

当日、来賓として、芦津大教会・井筒ふみ子様、大江大教会・中西太郎様、玉島大教会・岡﨑眞彦様ご夫妻が参列された。

多数の参列者のもと
五十日祭祭文を奏上される島村廣義先生

納骨式祭文を奏上する中村剛副斎主

こころの詩

笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

▼天理教道友社発行『天理時報』より転載

▽10月20日付「時報歌壇」

・福満分教会前会長夫人　福島悦子さん

秋桜（こすもす）めぐる畑に出でし日は
備後絣（びんごがすり）着て老いのおしゃれぞ

・芦品分教会教人　金谷眞佐代さん

病む日に夢に出て来し弟の
やさしき笑顔に胸の納まる

▽10月27日付「時報俳壇」

・海松ヶ岡分教会　池田広子さん

顔を見に来たと新米届けらる

・東悠分教会前会長夫人　田林美智子さん

台風のつめあと甚く神意とう

▼養徳社発行『陽気』誌十一月号、「道柳」より転載。今回の課題は「言」。

▽人　位

・川島郷分教会前会長　香取敏子さん

たんのうは言わぬが花と実運び

・芦品分教会教人　金谷眞佐代さん

たんのうは言いたいことば飲みこんで

▽佳　詠

・東悠分教会前会長夫人　田林美智子さん

一言の笑顔がむすぶ道の縁

▼表紙写真

（吉岡輝昭かさおか編集部員）

おかえり講話開催

10・25 詰所

布教部

布教部（田中隆之部長）では10月25日、午後7時から詰所3階講堂で、高橋和夫先生（牛込大教会部属・千山分教会長）を講師に迎え「お帰り講話」を開催、宿泊者など約130人が参加した。

先生は冒頭、教会家族、教会に住み込んでおられる人たちの複雑な環境から、「いんねんよせて守護する」という言葉を理解する事が大切であると述べられ、続いて自教会の会長に就任するまでの経緯と実兄の身上からつとめとさづけが重要であると話された。

そして現在の千山分教会の活動として、今まで教会の上に尽くされた高齢の信者さん方が自宅での療養が困難になった時の事を考え、教会境内地に住宅用介護施設を作り、それぞれの身体の状態に応じて教会に関わって頂き、おつとめを通していつまでも元気に生きた信仰をして息長らえて頂く事を心がけ、それが今の私に与えられた時旬のご用であると話された。

終わりに年祭活動は教祖130年祭のこの旬に乗り遅れない様、教祖に成人した姿をご覧頂く歩みにしてほしい。そして明日はお道の元旦であり、真柱様のをやの声を胸に治めて通る事が今の私達に課せられた有り方であると締めくくられた。

時旬を語られる

「第89回青年会総会」開催

10・27 本部中庭

青年会

10月27日、第89回天理教青年会総会が本部中庭で開催され、国の内外から2万7千人が参加した。

笠岡分会でも、各ブロックより多くの参加があり、家族連れの姿もあった。

青年会長様よりお言葉を頂き、更なる邁進を誓い合った後、お礼参拝をした。式典後は、詰所にて会食を行い、同じ笠岡につながる会員同士、和やかな時間をすごした。また、笠岡分会の年祭への心定め「一日一つにをいがけ」の周知徹底を促した。（笠岡分会副委員長　上原繁次）

勇み心いっぱいに

女子青年大会開催

11・4 おぢばで

婦人会

11月3日、4日と笠岡女子青年は、10年ぶりにおぢばで開催された女子青年大会に参加させて頂きました。女子青年大会では、婦人会長様の挨拶を始め、真柱様からもお言葉を頂きました。真柱様のお言葉の中には、「教祖のひながたが陽気ぐらしへの道であり、日常の中にある教理を肌で感じ、親神様からお与え頂いている身体に、自然に感謝を忘れず通ってもらいたい」とありました。私達人間は本当にたくさんのご守護の中に生かされているのだなぁと再認識させられました。大会の最後には記念品として配られたカラー手袋を付け、参加していた全国の女子青年さんたちと一緒にハンドダンスをしました。大会後は詰所で支部の集いを開き、大会に向けてあげられていた課題を、日々の活動である例会でしっかりと学んだ成果を発表しました。その他にも、感話や支部長様のお話・委員による出し物などしました。集いの最後にも、参加した人達と一緒にハンドダンスをして、大変盛り上がりました。また、大会に向けて笠岡女子青年の目印になるものをと思い、委員や担当の奥様たちと一緒になって作ったシュシュ[※1]を参加した女子青年さんに配り、記念品として持ち帰って頂きました。配っていると、先々ですごい！とか可愛い！などのお声をかけて頂き、すごく嬉しい気持ちになりました。たくさんの企画を考えていて、中々良いように行かない事もありましたが、担当者の奥様方や委員達、また皆様の支えに助けられ、親神様・教祖のご守護を受け、二日間を怪我や事故なく、そして大きな日程の崩れもなく無事通らせて頂く事が出来ました。有り難うございました。

（女子青年委員長　上原理子）

※1）シュシュ：ドーナツ状にした薄手の布にゴムを通して縮ませた髪飾り。ブレスレットとしても用いられる。

写真：●上 ＝ 委員によるハンドダンス。●右上 ＝「震源地」ゲームでアイスブレイクする参加者。●右下 ＝ 田中舞さん（福山）による感話。●左上 ＝ 枝廣美可副委員長による「十全の守護」のパネルシアター●左下 ＝ 詰所伏せ込みひのきしんを終え満面笑みの婦人会員たち。

◆女子青年担当者より

この度の女子青年大会に向けて、笠岡女子青年では、百名の心定めをさせて頂きました。この上については、支部長様より「育てる立場の婦人会も一緒に参加しよう！」と声をかけて頂きましたので、女子青年層以外に婦人会の皆様にも声をかけさせて頂きました。

その結果、大教会より大型バス１台、マイクロバス１台、その他、それぞれの教会からもバス、ワゴン車等を出して頂き、大会参加者約220名、その内、女子青年約110名の大きなご守護を見せて頂く事が出来ました。

これも、女子青年の声がけは勿論の事、教会長様、婦人会の皆様方が、「女子青年に育って貰いたい」という強い思いで、お力添えを下さった事に他ならないと思います。

我々担当者も、微力ながら、育成の立場でお世話取りをさせて頂いていますが、この大会に向けても色々関わらせて頂き、若い人達の勢いにリフレッシュさせて貰い、大変貴重な時間を過ごさせて頂きました。

これからも、「すてきなお道の女性」に育って頂ける様に、担当者一同、精一杯丹精させて頂きますので、皆様方にも後押し、お力添えを賜ります様よろしくお願い致します。

ワールドブラザーズ
全教野球大会第40回記念大会に参加

昨年まで笠岡大教会よふぼく野球チーム・ワールドブラザーズは、５年連続岡山大会を制し全国大会に出場してきた。

今年は記念大会として、全国全てのチームがおぢばに集結し、トーナメント方式で戦う大会であった。

５月に１回戦、２回戦を勝利した我がチームは、３回戦で本島大教会と対戦したが苦戦？の末、５―０で敗退した。

今年新監督を迎え、新たなチーム作りを始めた我がチーム。これから年祭に向かって一手一つに向かう素晴らしいチームになる予感がする。

興味のある方是非ご参加下さい。連絡は大教会まで。

＜布 教 部＞

○教会長講習会

期　日　２月２６日（水）～２７日（木）
会　場　笠岡詰所

＜管 理 部＞

○大教会年末大掃除

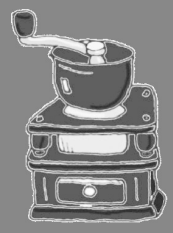
日　時　１２月２２日（日）　午前９時から

＜詰 所 掛＞

○詰所餅つき

日　時　１２月２６日（木）　午後２時より準備
　　１２月２７日（金）　午前７時より開始

談話室



鼓笛のオールドパワー健在!!

海松ヶ岡分教会　森本重吉

来年2月11日に開催される、第14回岡山教区団鼓笛フエステイバル出演に向け、鼓笛OB・OGが笠岡大教会に於いて、10月5、6の2日間合宿練習を致しました。フエステイバル出演2回目になりますが、このOB・OG会の第一の目的は、各教会、各隊に於いて過去にただの一日でも鼓笛活動に参加された全ての方々を対象に鼓笛フアミリーとして、楽しく集える場を設け、共々に昔を語り合い、道の友としての親睦を深め、互いに立て合い助け合ってより一層、道の御用に役立たせて頂きたいということであります。

先般の合宿に際し、御協力頂いた直属は、東本・明和・秋津・生駒・網干・岡山・玉島・愛豫・笠岡等であります。会場提供には大教会長様の快諾を頂き自ら御参加下さり、また、清水岡山教区団・明和団々長、青木玉島団々長、森本笠岡団副団長の他、総員25名で、出演曲目、「世界の果てから」（昭和45年こどもおぢばがえり主題歌）と「少年会の歌」の2曲を50年前の楽器ベルリラ・小太鼓等を持ち出し、楽しく練習しました。最年少は23才、最高齢は、70才でありました。鼓笛を通して育まれた友情、人間関係は年の差等、全く関係なく、素晴らしく楽しい合宿でありました。次の予定は2月1日～2日、於いて玉島大教会であります。どなたも参加自由ですのでどうぞ気軽に御連絡下さい。

連絡先：〇九〇-九〇六五-六八六一
〇八六五-四四-五一九四
森本重吉迄お願い致します。

教会おとまり会の報告

▼福芦隊

実施日　25年4月13日(土)～14日(日)
1泊2日

参加者数　少年会員17人　育成会員12人
合計29人

プログラム

13日(土)
15：00　開会式
30　英語タイム
17：00　休けい
15　ゲーム
18：00　夕食
19：00　夕づとめ
30　お楽しみタイム
21：00　夜食、就寝準備、消灯

14日(日)
6：30　起床
7：00　朝づとめ
30　朝食
8：30　掃除
9：00　お楽しみタイム
10：30　閉会式
11：00　解散

所感

最近の子ども達は習い事や塾などで忙しい子が多いため、普段接する機会の少ないような人や、新しいお友達と出会う機会を作りたいと思い、お泊まり会を企画しました。今回は17人というたくさんの子ども達に参加していただきましたが、エネルギーあふれる小学生のお世話取りをする為には、青年、女子青年、そして婦人会の方々や教会の皆様との連携、ご協力がとても有難かったです。力不足の面や、反省点もありますが、お泊まり会をきっかけにたくさんの人が教会へ集まり、楽しい時間を過ごせる、そんな会にしていきたいと思っています。

▼坪生隊

実施日　25年8月13日(火)～14日(水)
1泊2日

参加者数　少年会員8人　育成会員6人
合計14人

プログラム
13日(火)
10:00　三殿礼拝、会長挨拶
30　昼食準備
（全員でカレーづくり）
12:00　昼食
13:00　プール（メモリアルパーク）
風呂（ふれあいプラザ）
18:30　夕づとめ（お話し）
19:00　バーベキュー
21:30　おやすみ行事、就寝
14日(水)
6:00　起床
30　朝づとめ、ひのきしん
7:00　朝食
8:00　解散

所感　参加の少年会員は全員が未信者で、年齢も低かったのですが充実したお泊まり会でした。バーベキューを、未信者の子供の親が手伝ってくれ、ありがたかった。又にをいがけにもなったように思います。

▼稲倉隊

実施日　25年8月13日(火)～14日(水)
1泊2日

参加者数　少年会員8人　育成会員10人
合計18人

プログラム　祭典に引き続き実施。
年度の恒例行事として、芳井天神峡にて、川遊びとバーベキュー大会をしました。

所感　毎年の事なので、皆、この日を楽しみにしているようです。

▼香地華隊

実施日　25年8月14日(水)～15日(木)
1泊2日

参加者数　少年会員4人　育成会員4人
合計8人

内容　朝づとめ、夕づとめ、どこかへ出かける、食事。

所感　子供おぢばがえりに初参加して下さった家族と引き続き交流がもててよかったです。

▼芦田川隊

実施日　25年9月7日(土)～8日(日)
1泊2日

参加者数　少年会員5人　育成会員3人
合計8人

プログラム
7日(土)
17:30　集合、参拝、夕食
18:30　夕づとめ、教話
19:00　花火
30　入浴（銭湯）、自由
22:30　消灯
8日(日)
6:15　起床
30　朝づとめ
7:00　朝食、自由
11:00　解散

所感　例年通り、おつとめ、花火、銭湯での入浴、以外は、特に何もせず、子供達に自由にさせています。多少、羽目をはずしすぎの時は注意もしますが、皆、楽しんで過ごしてくれました。

▼笠岡隊

実施日　25年9月8日(日)

参加者数　少年会員29人　育成会員8人
合計37人

内容　ひのきしん、神様のおはなし、教祖のおはなし、ゲーム、食事、神殿案内、料理作り、オリエンテーリング、流しソーメン作り、ソーメン流し。

所感　来年は「おとまりで」という声が多かったのでその意向で。

第８７２期修養科募集要項（再掲）

先月号掲載分に誤り（赤字部分）がありましたので再掲いたします。

＊修養科期間

立教１７６年**１２月**１日～立教１７７年**２月**２７日

＊教　養　掛

３ヶ月間　田　中　隆　之　（大教会役員・福 山 分教会長）
１ヶ月目　福　島　大　介　（福 満 分教会長）
２ヶ月目　山　田　敏　教　（大教会准役員・甲井分教会前会長）
３ヶ月目　渡　邉　孝　信　（神 驛 分教会長）

＊募集要項

・志願者は、**１２月**末日現在で満１７歳以上で、必要書類を携え、上級教会を経由して大教会に順序参拝すること。
・**１１月**２５日までに笠岡詰所に入所し、教養掛の面接を受けること。
・３ヶ月の修養期間を修了後は、大教会での修養科修了講習会を受講し、**３月１日**午前１０時に解散。

＊教　科　書（必須）

『おふでさき』、『みかぐらうた』、『天理教教典』、『稿本天理教教祖伝』。

＊参　考　書（出来れば持参）

『おてふり概要』、『なりもの練習譜』（笛・打楽器または三曲）、『おやしき・史跡案内』。

＊携　行　品

おつとめの扇、筆記用具、認印、笛（男鳴物の講義で笛と小鼓の内、笛を選択する人のみ）。

＊服　　装

ハッピ及び帯・バンド、長ズボン（又は、それに類するもの）、靴。

書　　類	大教会	詰所	備　　考
「順序参拝票」	○	○	
「別　席　願」	○	○	・「初席願」の順序参拝がまだの者で、修養科入学後に初席を運ぶ者のみ。 ・願書に日付を入れない事。 ・おさづけの理拝戴願の順序参拝も合せて行なう。 ・「別席の誓いの言葉」は別席の誓いの日までに覚えること。
「席　　札」		○	
「別席のしおり」	○	○	
大教会　御供	○		
本　部　御供		○	
「おさづけの理拝戴願」	○	○	・「おさづけの理拝戴願」の順序参拝がまだの者のみ。 ・願書に日付を入れない事。
「おはなし」	○		
大教会　御供	○		
本　部　御供		○	
「修養科入学願」		○	・御供は任意であるが、慣例により、２００円以上。
「修養科入学事由書」		○	
大教会　御供	○		
「住民票」		○	

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます
親神様には一列子供の陽気ぐらしを楽しみにこの世と人間をお創造（はじめ）になり 銘々の心通りに身体をお貸し下さり 天然自然の御守護を下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます しかるに生まれ変わりを重ねる内に親の思いを忘れ 銘々勝手気ままな心になるが故に争いが生まれ 身上や事情に苦しまなければならない世の中になるのをあわれと思召され「このみちをはやくみとふてせきこんだ さあこれからハよふきつくめや」と天保九年十月二十六日 旬刻限の到来と共に教祖を月日のやしろとお定めになりこれの世界だすけの道をお始め下さいました。 以来私共は教祖のひながたを通してお教え頂いた 我欲を忘れたすけ一条に邁進すべく 日々は朝夕に御礼申し上げつつ「つとめとさづけ」を通してにをいがけおたすけにと努め励ませて頂いております
その中にもこの月二十六日は立教の元一日を祈念しておぢばで秋の大祭がつとめられますので その理にならい当教会に於きましても今日の吉日 只今からおつとめ奉仕人一同喜び心・たすけ心を一つに睦び合わせて 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて秋の大祭を執り行わせて頂きます 御前には今日は大切な日と楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し 持ち寄りました一万七千四百九十一枚のおたすけお願いカードに込められたたすけ心に自らのたすけ心を添えて 人のたすかりを願う真実の状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて世の中はます〳〵混迷を深めています 人の優しさを食いものにする犯罪が増加したり 隣人との関係はもとより家族間での人間関係が希薄になる等して家庭内での犯罪も増加しております 加えて東日本大震災をはじめ自然災害による被害も拡大しているように思われます 「かしものかりもの」の御教えを通してこれらは総て心通りの守護とお聞かせ頂いております 改めて年祭に向かうこの旬 我が身救かりの信仰から人救けの信仰にと変えて行かなければなりません 教祖百三十年祭へ向けて三年千日と仕切って年祭活動の最中 道に繋がるよふぼく信者一丸となって成人目標の実践 中でもおたすけお願いカードを通して一回でも多くの人の救かりを願うと共に よふぼくは一回でも多くのおさづけを取り次がさせて頂いて一人でも多くの人に人救けの心を写していく所存でございます
何卒親神様には 年祭の旬により一層の成人を目指してたすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 人救けの心が次々と伸び広がりよろづ互いに救け合って 一人ずつの救かりから救け合いの御守護へと立て替わり お望み下さる陽気づくめの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

大教会だより

◎教人資格講習会修了者

立教175年11月10日終講
久松　中村剛史

※お詫びと訂正

本年10月21日発行の『かさおか第52巻 第10号』2ページ「おたすけ・お願いカード 集計」の内、「平成25年累計」が「67,523枚」となっておりましたが、「69,523枚」の誤りでした。
また、11ページ「第872期修養科募集要項」の記事中、月度に3ヶ所の誤りがありましたので、再度、正しい内容を本紙16ページに掲載いたしました。
読者の皆様ならびに関係者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させて頂きます。

立教百七十六年 秋季大祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	中村邦義
	中村剛

講話	大教会長様

賛者	田中隆之
	三島渉
指図方	佐藤道孝

十二月講話	佐藤道孝

役割＼区分	坐り勤	前半	後半
地方	佐藤道孝	吉岡壽	中村邦義
	門脇元教	上原志郎	田中隆之
	内海史郎	上原浩	森本忠善
おつとめをどり	大教会長様	中村剛	岡崎和夫
	岡本久善	谷内伸自	岡崎真一
	上原繁道	中島誠治	杉原博之
	大教会奥様	武内正美	岡崎豊子
	門脇郁子	森本冨美子	門脇加津
	今川佐智子	谷内美知子	高木孝子
笛	今川昌彦	吉岡誠一郎	佐藤真孝
ちゃんぽん	森本忠平	横山逸郎	渡邉隆夫
拍子木	河原節喜	高木昭祥	武内清明
太鼓	三島渉	山野弘実	虫明立生
すりがね	笹尾正治	山田敏教	田林久嗣
小鼓	淺野明教	岡崎輝彦	赤木素志
琴	上原順子	内海安子	武内正美
三味線	佐藤香苗	笹尾一美	横山小智榮
胡弓	虫明好美	中村初美	三島照美

よりみち

先の本部秋季大祭で、諭達発布から一年が経った。周知のとおり笠岡大教会では、『さあ！ おたすけ』『祈る・動く・つなぐ』をスローガンに、年祭活動を推進している。

月毎に枚数が増える傾向にある「おたすけ・お願いカード」。日々の生活での実践項目を記した「成人目標」。また、個人での心定めなど、それぞれで年祭への歩みを進めている道中である。

では、私自身を振り返ってみた時、どうだろうか？ お願いカード記入や個人的な心定めは実践している。しかし、形ばかりの実践で、ただ単にこなしているのかも知れないと反省する。また本部や大教会の行事、取り組みに参加はしているが、その時だけ年祭に向かって活動している気になっていたかもしれない。

諭達の中に『よふぼくは、教えを学び身につけ、日々実践して、土地所の成程の人となろう』とある。やはり日々の生活態度、心遣いをおやさまのひながに照らし合わせる事の重要性を、改めて感じている。

メジャーリーグで活躍しているイチロー選手。誰しもが知るスーパースターである。そのイチロー選手が、２００４年にシーズン最多安打を更新した時に、次のようなコメントをした

『小さい事を重ねることが、とんでもないところに行くただひとつの道』

「近道」や「最短距離」ではなく、「ただひとつの道」と言い切っている。

私たちよふぼくは、「陽気ぐらし世界建設」という地球規模の大目標、大きな夢に向かっている。しかし、1日24時間という限られた時間の中で、一度で大きな事はできない。やはり、この大目標を叶えるためには、毎日小さい事を積み重ねる以外無いのかもしれない。

諭達発布から一年、日々の足元へのコツコツとした努力、身近な人への心配りを大切にしたいと改めて思う。そして、日々の具体的実践項目を印してある『成人目標』をしっかりとチェック・実践し、また、一人でも多くの教友に、取り組みの輪を広げていきたい。

（う）